# 第3講

# 論述問題の対処法

チャプター1 論述問題とは何か
チャプター2 論述問題の基本①資料読解
チャプター3 論述問題の基本②問題発生メカニズムの探索
チャプター4 論述問題の基本③答案の作成

問題を見てみよう

課題文をふまえ、これからの学校での学びに必要なことについて、1600字以内で論じてください。

もし、従来型の学習が必要なことを要領良く暗記する能力や、単純な知識の多さ、スピーディーで正確な処理能力を開発していたのであれば、もうすでにその役割は人間以外に移行しつつあります。とはいっても知識がまったく必要とされなくなるわけではありません。人間の担う役割が知識の量や詳細さではなく、知識の活用法に移行していくということです。ですから、学校での学びにおいても、知識を応用・転用し、活用する方法を身につける必要があります。

予測できない未来に対応することを目指すという文科省の方針は、東日本大震災やリーマンショックなどの災害や事件にうまく対応できなかった反省や、シンギュラリティに向かう数々の予測、日本が歴史上初めて人口減少社会へ突入したことなどに起因していますが、どれも一問一答型の教育の先に希望的な解決策が見えるものではありません。

「何のために勉強するのか？」という質問にうまく答えられないという教師や保護者は少なくありません。また、与えられた答えに納得がいかないという生徒も一定数います。そのままモヤモヤして自分で答えを探究していけば良いのですが、わからないままだとストレスになり、考えることをやめてしまう場合が大半に見えます。

一般的な回答としては「勉強をすれば良い学校に入学でき、良い会社に就職でき、お金に困らずに生きていけるから」というようなものです。

しかし、私のところにも毎年、「それなら、地位も名誉も財産も普通でいいから、勉強やめてもいいですか？」という生徒に困っているという保護者や先生方からの相談は絶えません。ここに今までの教育がハマってしまっていた「目的の混乱」という落とし穴があります。

そもそも、何のために学ぶのかという目的が現在のような形で混乱し始めたのは、明治維新からです。

これは、急激な西洋的価値観の流入や、帝国主義に向けた国策が影響していると考えられ



生徒メモ欄

教員記入欄

ますが、江戸時代までは多くの私塾において、学ぶ理由は「他者の気持ちをわかるため」とされていました。学ぶことで多くの人と共感できるようになり、その結果、頼られてリーダーシップを発揮し、地位も財産も得ることができるというものです。

　つまり、目的はあくまで他者への共感なのです。「より多くの人の気持ちをより深くわかるため」という目的であれば、本心から納得しない生徒はほとんどいません。近代合理主義が作り出した教育の構造のなかで、大人自体が目的の混乱を起こしてしまっていることが、感性の豊かな生徒たちの学びを疎外してしまっているともいえます。

　間違った逆算的発想が目的を混乱させてしまい、また正当な手順でないことも正当化してしまっていたわけです。自分なりの前提や論理があれば良いのですが、そうでないのにそう思い込んでしまっているのであれば、まさに思考停止状態といえます。

出典：石川一郎、矢萩邦彦，2019，先生、この「問題」教えられますか？　教育改革時代の学びの教科書，洋泉社
※問題作成にあたり一部の見出しを省略しております



生徒メモ欄

教員記入欄

回答例を見てみよう

　課題文において筆者は、人間が担う役割が知識量や詳細さではなく、知識の活用法に移行していくに伴い、学校での学びにおいても、知識を応用・転用し、活用する方法を身につける必要があると述べている。一方で、「勉強」の本来の目的は他者への共感であるにもかかわらず、目的の混乱が生じているという。近代合理主義が作り出した教育の構造のなかで、大人が目的の混乱を引き起こし、感性の豊かな生徒たちの学びを阻害していると筆者は指摘する。私はこの内容をふまえ、学校での「学び」の目的を明確化し、生徒の主体性を尊重することが必要だと考える。

　教育は知識を習得し、技能として再現することを主としてきた。しかしながら、学びに向かう目的が不明確な状況で、教科書の内容を理解し、大学受験に向かい合うための教育に終始するケースがある。「何のために勉強をするのか」という問いに明確な答えを示すためには、「他者への共感」「社会貢献」という目的をもち、学びが自己中心的なものではなく、社会全体のためにあることを強調することが重要となる。そして、学びを実生活や問題解決に応用できるような教育方法が求められる。

　こうした学びのなかで、生徒自身は学びの目的や方法を考える機会を増やすことができる。学ぶことの意味を自分でみいだし、内発的な動機が生まれることが期待できる。そして、教師も知識を教えるだけでなく、生徒の思考を促し、共感を育む存在としての役割が求められることになる。従来の教室のみならず、地域社会に出ることなど、多様な学びの場を提供することにより、生徒がさまざまな経験を通じて学びを深めることが可能となる。

　また、こうした学びを進めるなかで評価方法の見直しが促される。知識の暗記やテストの点数のみならず、生徒の成長や学びの過程を評価する方法を導入することにより、学びの質を向上させることができるようになる。特に主体性評価を行うことにより、生徒の知識および技能だけでなく、思考力・判断力・表現力や学びに向かう力を測ることが可能となる。学びに対する生徒の主体性が評価され、尊重される方向に向かうことが期待できる。

　こうしたことを実現するには、教育方法の見直しが必要となる。例えば、生徒が地域の課題をテーマにプロジェクトを立案し、解決策を



生徒メモ欄

教員記入欄

考えるプロジェクト型学習、企業やNPOといった学校外での実地体験を行うフィールドワークやインターンシップ、教室内でテーマをもとにしたディスカッションを実施して生徒同士が意見を交換する機会を設けることなどが考えられる。学校内外の異なる視点を理解することにより、共感する力や批判的思考を育むことが可能となる。

　学校現場においては、学校の教育方針を見直し、知識の活用や共感を重視する方向へシフトし、教師が共通のビジョンをもつことが求められる。また、教師の研修とサポートが必要となる。新しい教育方法やプロジェクト型学習に関する研究を定期的に実施し、教師が自信をもって実践できるように支援する。メンター制度を導入し、経験豊富な教師が新しい教師をサポートすることも考えられる。加えて、教師同士の連携を強化し、学年や教科を超えたチームでプロジェクトを進めたり、カリキュラムを柔軟に調整して生徒の興味や地域のニーズに応じたテーマを取り入れて実践的な学びを促進したりすることが考えられる。

　加えて、評価方法の改革も考えられる。成果物の発表会やポートフォリオ評価を導入し、学びの過程を重視する評価方法にしたり、保護者や地域の人々も評価に参加できる仕組みを作ったりすること、また、プロジェクトや新しい取り組みの成果を学校内外で共有し、成功事例や課題についてフィードバックを得ながら、継続的な改善を行う。時に生徒の意見や要望を聞く機会を設け、彼らのニーズに基づいた教育を実践し、意見をまとめたり、評価軸の策定に参加させたりすることが考えられる。

（1600字）



生徒メモ欄

教員記入欄